学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０２６．１１．７
文責／ＪＵＮ

「学び」は、デジタルより紙媒体

２０３０年度以降に小中高で導入されるデジタル教科書のあり方を示す「指針」の素案が、10 月 22 日、文部科学省から公表された。

読売新聞のオンライン版の記事に踊る「新教科書は紙中心の学びが基本、『ハイブリッド教科書』でデジタルは『補完』」というタイトルが目に飛び込んだその瞬間、私は、「よしっ！」とうなずいた。

これは、教科書はどのように作られるべきかだけの「指針」ではない。「子どもの学びはどうあるべきか」を、文科省が示したのだ。だから、学校現場の教師は、もちろん各都道府県、市町村の教育委員会も、今すぐに、この指針に謳われていることは何なのか、何をどう具現化しなければならないのかと検討しなければならない。もし、２０３０年度からと考えたら、それまでの４年間の子どもたちの「学び」に、こんなに重大な指針が反映されないことになるからである。

デジタルに偏った授業、デジタルに頼った授業をしている学校・教師は、今すぐ見直すべきである。

１　私はＩＣＴ化をどう考えていたか

サブ・テーマを「聴き合いとＩＣＴの往還が生む豊かな授業」とした『続「対話的学び」をつくる』（ぎょうせい）を上梓したのは、5 年前の 2021 年（令和３年）である。

この書は、書名にあるように、文科省の授業改善の指針「主体的・対話的で深い学び」で謳われた「対話的学び」について詳述したものである。ところが、ちょうどその頃、ＧＩＧＡスクール構想の前倒しで１人１台端末が実現したことによる教育のＩＣＴ化が急速に進められ、それは「対話的学び」とどう関係するのかという疑念が持ち上がった。そこで、対話的学びとＩＣＴ化とをどうかかわらせるべきかについて述べる章を加えて上梓したのであった。

以下、その章で記したことを抜き出してみる（一部語句修正）。

これを読んでいただければ、今回の、デジタル教科書に対する素案が、５年前に私が考えていたことと齟齬がないことに気づいていただけるだろう。

> 学ぶということは、一人ひとりが自ら思考し、自ら取り組み、自らのわからなさに立ち向かい、自ら自分らしい考えを見つけ出し、自分の考えを創り出す創造的な営みです。
>
> もしそれが、タブレットのような端末機器を使うようになり、ＡＩも活用できるようになって、機器を操作するだけで結果が得られることになれば、苦労しないで、楽に学習したり生活したりできることになります。そうなったとき、子どもたちの学びは確実に衰退します。それはなぜでしょうか。

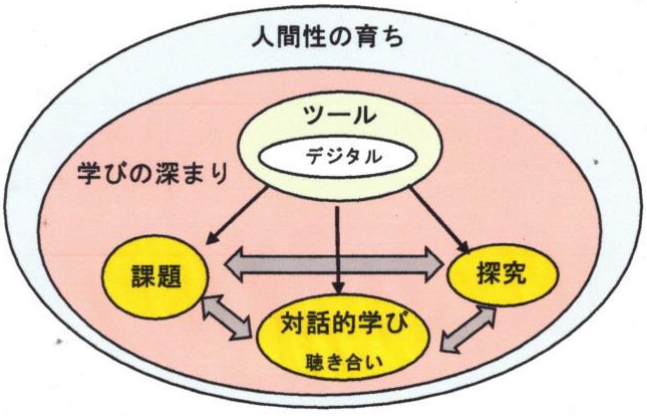
学びは、時間をかけて、苦労してこそ深くなるからです。結果を早く求めることではないからです。結果よりも、その結果に行き着くまでの過程で、いろいろ考えいろいろやってみる、そこに学びあるからです。そのことは、第１部で詳細したとおりです。

もちろん、デジタル機器の発達により、とても人間ではできないことができるようになっていきますから、それを活用しない手はありません。これからの時代を生きる子どもたちは、自分たちの生活や仕事を豊かにするために活用できることは活用する技能を身につける必要がある、そのことは否定しません。

しかし、何もかもデジタルに任せてデジタルに依存するのではなく、子どもが自分の体と頭を使い、自分の手足を動かしてじっくりと考えることが大切なのです。また、芸術的作品を自らの発想と工夫によって創作することも大切です。もちろん、一人ではできないことに対しては、すぐデジタルに頼るのではなく、仲間と協同的に取り組むことによって創り上げていくことも忘れてはなりません。つまり、次ページの図（下図）のように、人間性の育ち、学びの深まりが大前提としてあるということです。そして学校における授業は、「課題」、「思考・探究」、「対話的学び・聴き合い」の３要素がかかわり合って深まることになります。デジタルは、その際活用するツールの一つに過ぎません。

もちろんデジタルには他のツールにはない、今の時代ならではの意味があることは言うまでもありません。ですから、教科の学びのために活用することとは別に、機器の操作について学ぶことは必要で、そのことによってこれからの時代を生きる能力を高めることになるでしょう。しかし、１人１台端末配備への対応が、そういった機器の操作の学習に傾斜することになったら、それは教育にとってむしろマイナスになります。

また、デジタルを活用しなくてもよい授業内容であるにもかかわらず、やたら使わせることになったら学びが脆弱になります。そう考えると、デジタルを有効に活用することと、デジタルを活用しない活動・探究を、どのように組み合わせるか、そしてそれぞれの良さをどのようにつなぎ合わせるか、そこが大切になってくるのではないでしょうか。



以上のことから、大切なことは、なぜそこでデジタルなのかという判断をするとともに、デジタルの活用が子どもたちの学びの深まりにつながるのか、人間性の育ちを図ることになるのかと考えることが重要なのではないでしょうか。

この文章の後、私は、ＩＣＴと聴き合う学びとをつなげた算数と社会科の授業事例を掲げ、その上で、デジタルを活用する授業を準備する際、必ず心に留めておかなければならないことを、以下のように述べている。

- もっとも大切なことは、デジタルをどう活用するかではなく、どういう学びを目指すかでなければならない。デジタル活用の前に、学びのデザインが存在する。

- 教科により、題材・単元により、デジタル活用によいものと、逆に必要ではないものとがある。使う必要がない場合に使うことはないと思われるが、使えると判断できる場合でも、デジタル使用で時間的ロスが生じるとか、学ぶ焦点がぼやけたりする危険性があるときは、無理をして使わないほうがよい。

- 子どもの学びに対する意識を早く正解を出す方向に走らせないようにしたいし、そのように作られているソフト・学習材はなるべく使用しないようにするとよい。もちろん、デジタルに閉じこもる孤学に陥らないようにもしなければならない。学びは、すぐにはわからないことにじっくり取り組むことにより生まれる、さまざまな考えと擦り合わせることによって豊かになる、この二つを教師はいつも忘れないようにしなければならない。

- わからなさを抱えている子どもや、デジタル機器の操作が不得意な子どものことを決して忘れないようにしなければならない。そういう子どもに対する教師の対応をいつも心がけるとともに、困ったときに支え合うことのできる子どもの関係性を育てることが重要である。「学び合う学び」は、デジタルを使用する場合でも必要である。

- 学びの深まりを生み出すために、デジタルを「主体的・対話的で深い学び」において活用するようにしなければならない。中教審の答申でも「それぞれの学びを一体的に充実し、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげる」と述べられているとおりである。しかしそれには、教師に相当な意識転換が必要である。

- 子どもがデジタルを使って学びに取り組んでいるとき、子どものやっていることが、課題から逸れないように留意するとともに、生まれてくる考えや発想をその後の学びにどう生かしていけばよいか、教師は常に考えていなければならない。子どもや学びに対して、そういう意識を常に抱いていないと、どれだけデジタルがそのときの学習に対して有効なツールであっても学びの深まりにはつながらない。

- デジタルを活用する授業であっても、使わない授業であっても、教師の子どもを見つめるまなざし、子どもの学びを見つめる目がどういうものであるかで子どもの学びは大きく左右される。教師は、デジタルに頼ったり、デジタル任せにしたりするのではなく、題材に対する見識を磨き、子どもの学びにいつも心を砕くようにしたい。学びの深まりにつなげられるかどうかは教師次第である。

- 未来型の授業とは、デジタルを使っているかどうかで決まるものではない。もちろんデジタルは未来型の授業にとって必要なツールである。しかし、もっとも大切なことは、どういうツールを使おうと、子どもたちの学びが豊かになること、子どもたちの人間性が育つことでなければならない。

２　学びの深まりにつながらないデジタルの活用

１人１台端末配備からほぼ６年が経過した。その間、私は、毎年、いくつもの学校を訪問し、それらの学校においてすべての教室に足を運び、授業を参観してきた。そのうち、いくつもの教室で、デジタルによる学習が行われていた。

私は、教師たちの伴走者である。子どもの学びの深まりと育ちを目指す教師たちの思いが実っていくように支えるのが役割だ。だから、教師がその授業において子どもの学びをどのように生み出そうとしているかを探り、それに対して子どもたちがどういう状況であるかを見る。そのときどのような学びが生まれているか、または滞っているか、それは、すべて、子どもから伝わってくる。子どもが深い学びの世界に入っているときは、私は、その世界に引き込まれる。逆に、子どもから何も伝わってこないことがある。そのとき、子どもは、たとえ教師から指示されたことを行っていても、その学びに心から打ち込んではいない。その違いはどこからくるのか、それは、教師も子どもも、学ぶ対象に対して魅力を感じているかどうか、その異なりからくるのではないだろうか。

さて、デジタルによる授業において、そんな私の学びを見る感覚はどう働くことが多いかだが、全くないとは言えないが、そのほとんどにおいて引き込まれることがない。それは、私だけでなく、子どもも学びに引き込まれていないことを表している。なぜそうなるかは一概には言えないが、どうも、子どもの意識が散らばっているように感じることが多い。

子どもたち一人ひとりのタブレットにデジタル教科書の画面が送られ、その画面をもとに考える社会科の授業を見た。先生の説明を聞きながら、子どもはそれぞれにタブレットを見つめていた。そんな子どもの様子を眺める私の目に映ったのは、画面のページを次々とスクロールしている何人かの子どもの姿だった。子ども同士の対話はないから、何を考えてスクロールしているのか分からない。何かを探している様子でもない。子どもは学びに集中していない、それだけは確かだ。

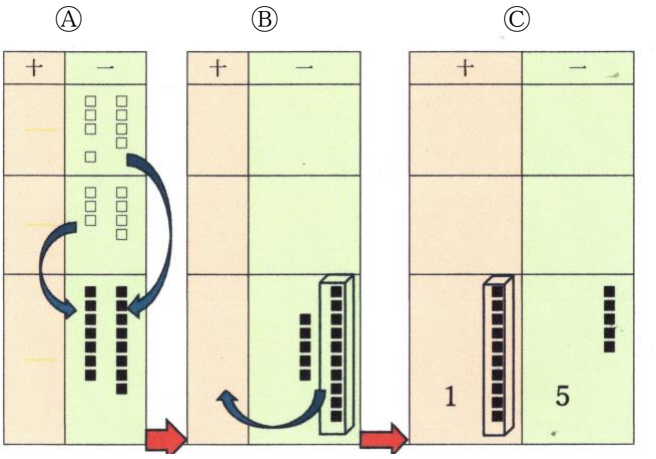
それに対して、ある学校のある学級では、大きな用紙に印刷した異なるグラフを２枚ずつ各グループに配り、「この二つのグラフから、今日の課題の〇〇について分かること探して！」と先生から指示された授業を見た。２枚ずつなので、４人グループだけど、ペアでグラフを見ることができる。子どもたちは、２枚のグラフを横に並べて、すぐ気づいたことを語り出した。「うん、そうか！　だったら、ここのところで増えてるよ」「えっ、…なんで増えたんだろう？」というように。

１人１台端末は「孤学」になりやすいとよく言われるが、その通りだ。対話が起こらず、個人差が生まれ、気づきが少なく、あったとしても広がらず深まらない。だから、どうしても教師が話して進めていくことになる。それに比べて、紙に印刷されたグラフが配られると、子どもたちはさっと聴き合って考える態勢に入る。もし、グラフや写真が３枚とか４枚とかになっても、それらをすべて横に並べて比較したり突き合せたりして考えることができる。どの子どもも気づきを出し、聴き合い、学びの方向が定まり深まっていく。教師の説明などなくても。

小学校低学年の算数の授業でも、デジタルではそうはいかないと感じる場面に出会った。課題は、「8＋7」というたし算だった。

その学級では、具体的操作活動に使うツールとしていつも「ブロック」を使い、そのブロックは位

取り表に置いて考えることにしていた。



Ⓐの図の「一の位」に８と７を置く。そして、それを「足す」ということで、一緒に一番下の段に降ろす。そうしておいて、Ⓑの図のように「10 個」だけケースに入れる。これが「十のケース」である。「十のケース」は「一の位」に残ることはできない。それで「十の位」に移る。それがⒸの図である。

これを、手でブロックを持って動かして行う。こういう活動を「半具体物による操作活動」と言って、低学年の算数では必須の学び方になっている。

「半具体物による操作活動」は、デジタルの画面でもできないことはないだろう。けれども、画面上のバーチャルで行うのと、実際に手で触って動かして行うのとでは大きな違いがある。「手は第二の悩」と言われるほど、手の動きは脳を刺激するからである。

同じことが、書くことについても言える。文字を書くことも文章を綴ることも、キーボードに打ち込むことによってできるけれど、「手書き」がもたらす認知力、言語力、あらゆるものに対する感覚や思考力を私たち人間は失ってはならない。

というように、ここに掲げた事例は、見ていただいてすぐ分かる易しい内容にしたけれど、このようなことは、どの学年においても、どの教科においても生まれることである。実際に手足や体を使って行わないと、人間の脳はよりよく発達しないのだ。

３　デジタルで文章を読むことは？

世の中がデジタル化して、書籍の出版に変化が見られるようになった。紙媒体の書籍の出版が少なくなり、電子書籍化が進んできたのだ。私も何冊かの本を上梓してきたけれど、今後の発刊は難しいのではないかと思っている。

けれど、私の感覚では、「読む」という行為は、デジタルより本のほうがはるかによい。どんな文章でも、中でも、小説などは特に電子書籍で読む気にはならない。何が書かれているかはデジタルで理解はできても、小説を読むということは、想像の世界に旅立つわけであり、そんな雰囲気にはどうしてもなれない。さらに、１ページ１ページをスクロールしていくことになるが、本だと、今読んでいる場面までのことが、それまでのページに詰まっている実感があり、必要があれば、さっとそのページに戻ったりもしているけれど、どう考えてもデジタルの画面でごちゃごちゃ操作するなんてことをしていたら雰囲気が壊れてしまう。私がいま楽しんでいる想像の世界は、この一枚一枚めくりながら読み進める手ざわりの、この厚さの、このデザインの、今手にしているこの本の中にある、それが「読む」という営みを支えてくれている。などと思うのだが、それは、私のこれまでの経験がそう感じているだけで、今の若い人はそういうことがないのかもしれないと思ったりもした。

そんな折も折、冒頭のように、「教科書はデジタルより紙中心」という文科省の素案が出されたのだ。そこに記されていたのは、「紙は文章を読み込んだり、考えを深めたりする場面で効果的」という文言だった。やっぱりそうなんだ、私は一人合点した。

４　教師の見識が問われることになる

10 月 26 日付の読売新聞の社説に、「デジタル教科書、現場の声に合致する『紙中心』」という「社説」が掲載された。そこに、「デジタルは動画や音声を活用できる一方、深い思考や記憶の定着には紙の方が優れているという研究結果がある。小学校低学年については、認知処理能力が未熟で、情報量の多い端末の操作は負担が大きい、とも指摘されている。」と記されている。

文科省の素案が出た日のテレビで、インタビューを受け子どもが「デジタルの方が楽しくてぼくは好き」と答えていたが、これまで何度か述べてきたけれど、その「好き」が、「楽しい」とか「便利だ」とか「簡単」ということなら、そういう傾向が進めば進むほど、人間は、大切なものをどんどん失い退化させていくことになる。使わなくなった能力は消えていくに違いないからだ。子どもは、そんなことまで分からない。だから、これは大人の責任だ。

読売新聞の「社説」の最後は次のように締めくくられている。「最も重要なのは、子供たちの人間形成や成長である。その基本は読み書きにある。新しい教科書を使って、児童生徒をどう育むか。現場で工夫を凝らしてほしい。」

新聞でこのように言われるまでもなく、デジタルにするか、紙にするか、操作活動にするか、その判断は、教師が行うものである。そのとき大切なこと、それは、まず、何を学ぶのかに対する見識を高めることである。授業を行う前の学習材研究を怠ってはならない。けれど、それだけでは子どもが学ぶ材料にはなっていない。子どもの実態と適合して初めて学習材になるからである。学習材の真正性を損なわず、子どもの実態に適合させる、そのとき、デジタル、紙、操作活動などのどれが最も適しているかの判断が必要となる。

冒頭で述べたように、教科書の改訂は、２０３０年度だが、それまで４年間の子どもの学びが今のままでよいわけがない。「現場で工夫を凝らしてほしい」という新聞社説の声は、今すぐ受け止めなければならない。今すぐ、日々の授業のあり方を見直さなければならない。

その際、思い出してほしい、５年前に私が著書に記した次の二つのことを。

- ⦿　なぜそこでデジタルなのかという判断をするとともに、デジタルの活用が子どもたちの学びの深まりにつながるのか、人間性の育ちを図ることになるのかが重要。

- ⦿　もっとも大切なことは、デジタルをどう活用するかではなく、どういう学びを目指すかでなければならない。デジタル活用の前に、学びのデザインが存在する。

これは、大切な一つのターニングポイントである。

紙媒体の文化を喪失させてしまったら、その社会の人間性は虚しいものとなる。生きづらい社会になる。賢明な人間はそんなことはしない。このターニングポイントは、そのことを私たちに教えてくれたのだ。